

mundi

The Magazine of the Japan International Cooperation Agency

[ムンディ]

4

2016 April
No.31

特集 地域の宝 おらがまちの世界一



美しい島国で見た現実

Jamaica ジャマイカ

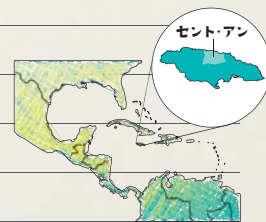


澄み渡った青空と、ごみの山。

緑が生い茂る山道を進むと、鼻を突く異臭とともに不思議な光景が現れた。思わず言葉を失ったが、ファインダーを通して見ると、対極にある二つが共存する光景はどこか不気味な美しさを放っているようにも感じた。

ここジャマイカには、日本のようなごみ焼却施設はない。各家庭から集めて山中に埋め立てるのが、一般的なごみ処理方法だ。四方を海に囲まれ、生活物資の大半を輸入に頼っているが、再利用やリサイクルされる物はごくわずか。日々、多くのモノが島に届き、ごみだけがたまっていく。

「雨が街をきれいにしてくれる。ごみが流されて“消える”から」。活動中に耳にした住人の言葉が表すように、まだまだ環境問題への意識が希薄なジャマイカ。世界有数の生物多様性を誇る自然環境が、未来永劫続くことを願ってやまない。



撮影：森島 健太（ジャマイカノ青年海外協力隊OB）

あなたの作品募集中！

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や開発途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

応募条件 ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録形式はJPEGを推奨します。

応募方法 お名前、連絡先(電話番号とEメール)、エピソード(300~350字)、記名の可否をご記入の上、写真と共に応募先アドレスまでEメールでお送りください。

*応募作品は本コーナーの他に、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこちら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募 / 問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(『mundi』編集部宛)

「mundi」はラテン語で“世界”。開発途上国の現状や、現場で活動する人々の姿を紹介するJICA広報誌です。

Contents

02 my photo 美しい島国で見た現実 ジャマイカ

04 特集 地域の宝

おらがまちの世界一

北海道・東北 創業100年 新たな局面へ

関東 迅速診断で効率よい感染防止

北信越 ミャンマーの健康を守る、富山の配置薬システム

東海 “日本の茶処”が積み上げた知恵 紅茶の品質向上に活躍

世界とつながれ 地方の宝

近畿 今こそ海外経験を生かすとき

中国・四国 世界で愛用される精米機を造り続けて

九州・沖縄 梅栗植えて、世界へ飛翔



24 JICA STAFF 不動田 朋浩 JICA国内事業部／中小企業支援事業課

25 JICA UPDATE

26 Voice 清水 吉朗 はくい 羽咋市役所 産業建設部農林水産課 課長補佐

28 ココシリ 「ここが知りたい」いろんなトピックを分かりやすく解説!

30 地球ギャラリー

ボツワナ

二つの世界遺産を求めて —アフリカの秘境国に行く



37 イチオシ! 本・映画・イベント

39 MONO語り 草と木と、羊毛のぬくもり

40 私のなんとかしなきゃ! 山田 彩乃 ミス・アースジャパン2015、地域活性化モデル



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙

©Getty Images

山や谷を切り開き、石垣を積み上げて作られた棚田は、山間部の多い日本における先人たちの知恵と苦勞の結晶と言える。地域の美しい風景や優れたノウハウは、世界に向けて発信していくべき日本の宝だ



特集 地域の宝

おらがまちの世界一

この町工場の技術が、実は業界シェア、ナンバーワン。生活に根付く知恵が、実はあの地域発祥。そうした日本の地方の技術やノウハウが、開発途上国の抱える課題の解決に生かされているのをご存知だろうか。地元の活力も生み出す地方の宝に注目だ。

東京だけじゃない 地方は優れた技術の宝庫

古くから受け継がれてきた伝統や、企業が考案した画期的な技術、さらには長年の経験を通じて自治体が培った公共サービス提供のノウハウまで、日本の地方にはキラリと光るさまざまな英知が存在する。それらは、住み慣れた地元民なら誰でも知っているものの場合もあるし、地域の知られざる「宝」であることも少なくない。

近年、ODA（政府開発援助）事業を通じて、こうした地方の宝を開発途上国が抱えるさまざまな課題の解決に生かそ

うという動きが活発化している。そうした取り組みは、支援先の途上国側にとっても有益であるだけでなく、地方にとっても技術の継承や海外展開のきっかけとして重要だ。さらに、協力を通じて、支援元が自分たちの製品やノウハウなどが世界水準であることを実感し、翻っては、地元住民が地域の誇りを再認識する機会にもなっている。

そうした地方企業の代表とも言える石川県金沢市の会宝産業株式会社は、自動車リサイクル業の国内最大手で、現在、世界80の国と地域に中古自動車部品の輸出・販売を行っている。同社の近藤典彦代表取締役会長は、自身の経験をこう語る。

「日本で廃車とされる車の部品は、特に途上国から高い需要があります。でも、従来、その売買は、一山いくら」という扱いで、それでは個々の部品の信頼性が分かりませんでした。そこで、当社では、一つ一つの部品を査定し、適正価格を付けて販売するようにしたのです。これにより、海外バイヤーに安心して部品を買ってもらえるだけでなく、廃車同然であっても適切な代金を支払って国内の顧客から車を買取ることができるようになりました」

同社が、2010年に世界で初めて定めた自動車中古エンジンの性能を評価する規格は、「PAS77」として英国規

格協会から正式に発行されている。

活躍の場は世界に 感謝の気持ちは地元へ

世界に羽ばたく地方企業のトップブランドである近藤さんは、日本が経済発展を遂げる過程で、各地あるいは各業界が培ってきたさまざまな知恵や経験を途上国に生かすことの重要性を指摘する。「そのためには、まず、自分たちの事業に対する誇りと利他の精神を持つことが大切です。華やかな新車の製造・販売に対して、リサイクル業は静脈産業と言えます。

私たちは、事業を通じて世界に資源循環型社会を作ることを目指しており、地球

〈取材協力〉
会宝産業株式会社
代表取締役会長 近藤典彦氏

1947年石川県出身。高校卒業後、東京の自動車解体業者に就職。その後、石川県に戻り、22歳で「有限会社近藤自動車商会」を設立。92年からは「会宝産業株式会社」として、国内外で中古エンジンをはじめとする自動車リサイクル事業を展開し業績を伸ばす。著書「エコで世界を元気にする!!」(PHP研究所出版)。

地域の宝を掘り起こそう!

中小企業が持つ優れた技術や、地域が誇る特産品。実は、それが海外からの注目の的となったり、開発途上国の課題解決につながったりと、さまざまな可能性を秘めている。穴埋めクイズに挑戦しながら、日本の各地に眠る“宝”を探しに行こう!

Q.5 近畿の宝

from 和歌山県

地域ブランドの〇〇

温暖な気候に恵まれた和歌山県有田市では、地域ブランドとしてこの農産物を売り出している。近年、そのおいしさを世界に広めようと、地元の企業が海外での販路拡大に取り組んでいる。中心となっているのは、タイで果樹栽培を指導した経験を持つ青年海外協力隊の元隊員だ。

Q.3 北信越の宝

from 富山県

300年以上の歴史を持つ〇〇

一家に一箱。富山発祥のこのシステムは、各家庭に1セットを預けて、そこから使った分の代金を後から受け取り、再び補充するというもの。富山大学が中心となって、ミャンマーにこのシステムを普及・定着させることを目指している。

Q.1 北海道・東北の宝

from 北海道

〇〇の収穫機

北海道の特産品と言えば欠かせないのがこの食材。その収穫機の国内シェア7割を占めるトップメーカーが帯広市にある。最新の技術を駆使した収穫機は、この食材の生産量世界2位を誇るインドへと渡り、現地の農家たちとの挑戦が始まっている。

Q.6 中国・四国の宝

from 広島県

毎日の食卓を支える〇〇

広島県のメーカー企業が手掛けているのは、日本の食卓の主力のおいしさを追求したある農業機械。実はこの企業、アジアや欧米、南米などにも拠点を持ち、日本のみならず世界でも圧倒的なシェアを誇る。世界に貢献するその機械とは。

Q.2 関東の宝

from 千葉県

〇〇の迅速検査技術

おとし、日本でも約70年ぶりに国内感染が確認されて話題となった感染症。千葉県にある企業は、この感染の有無を迅速かつ正確に判定することができる検査キットを開発した。検査設備が無い途上国の診療所などでも活用できる製品として、今、注目が集まっている。

Q.7 九州・沖縄の宝

from 大分県

村おこしとして始まった〇〇

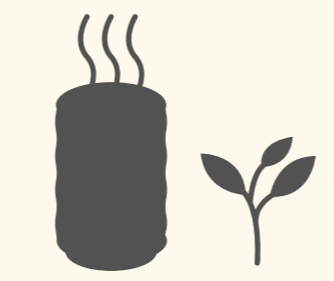
それぞれの地域が特産品を開発して、地域振興につなげる。大分県大山町を発祥とし、日本ではすっかりおなじみとなったこの運動は、青年海外協力隊の活動などを通じて、タイやマラウイ、キルギスなど海外にも広がりを見せている。

Q.4 東海の宝

from 静岡県

〇〇の成分分析計

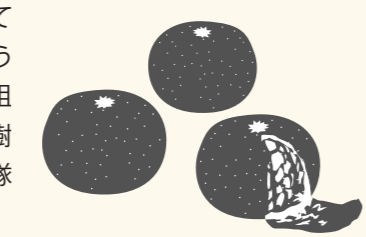
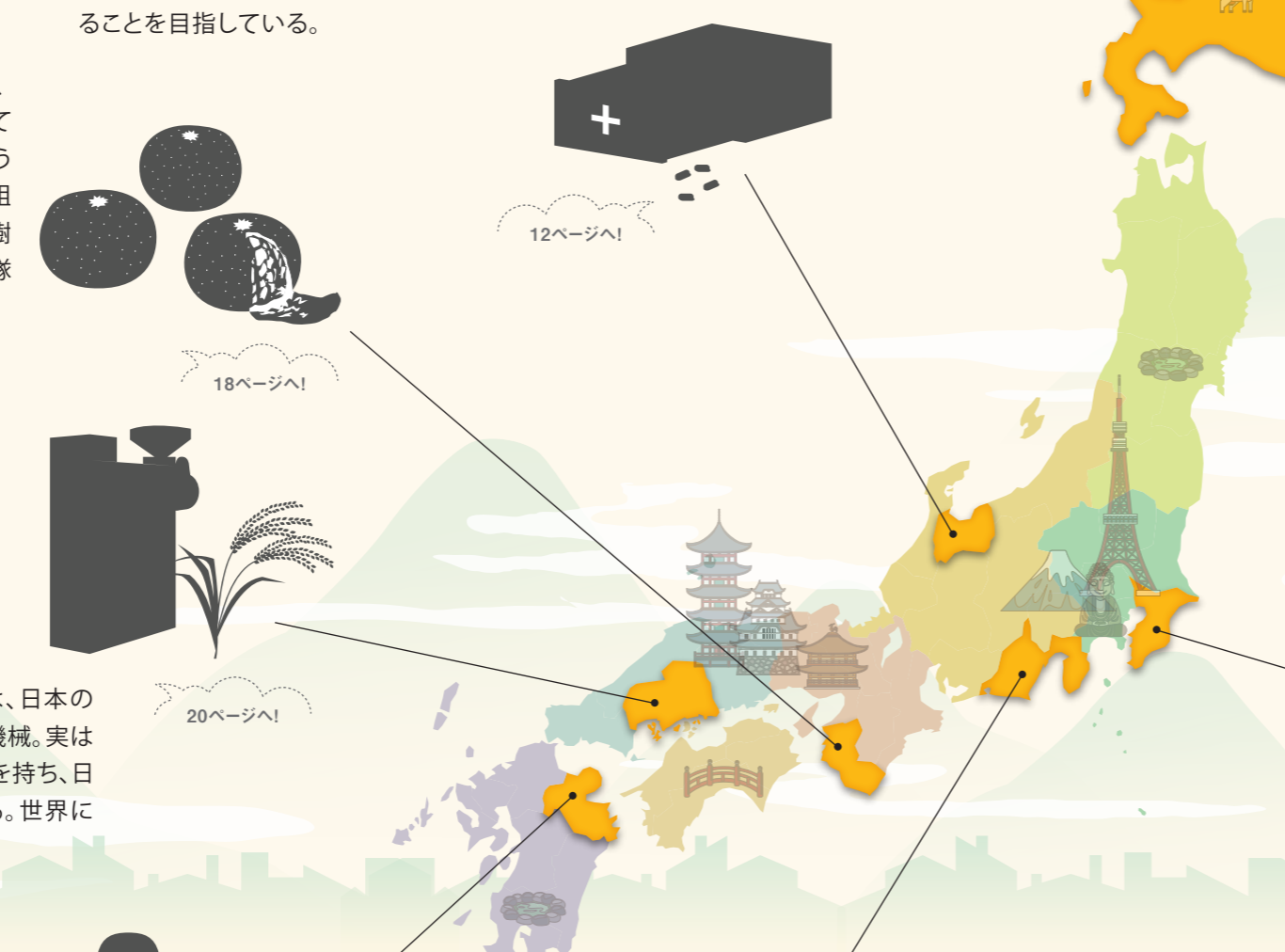
静岡県の名産品と言えば、これを思い生産量は堂々の日本一だが、実はそのシェア100%を誇る企業も県内に存在し、世界有数の産地であるスリランカ



14ページへ!

浮かべる人が多いだろう。成分を分析する機械で国内する。この優れた技術は、同に伝えられている。

環境の保全に貢献できるこの仕事に誇りを感じています。廃車のリサイクルシステムを世界に広めることを目指す同社。JICAと連携して、途上国で調査を実施することは、そうした取り組みを進める上で効果的な手法だという。自らの強みを世界の課題解決に生かすことに加え、近藤さんが強調するのは、地元への還元だ。「この地に生まれたご縁を大切にしたいと思うのです。リサイクルの必要性を楽しく学べる当社主催の『会宝リサイくるまつり』には、例年、3000人を超える地元住民の皆さんが足を運んでくれています」。さらに、同社は地元の耕作放棄地を使って、5年前から本格的に農業にも取り組んでいる。その手法は、廃油ポイラーを活用したハウス栽培という同社ならではのものだ。「高齢者の活躍の場にもなれば」と語る近藤さん。人気商品、しあわせのトマト。のファンも増え続けているという。



18ページへ!



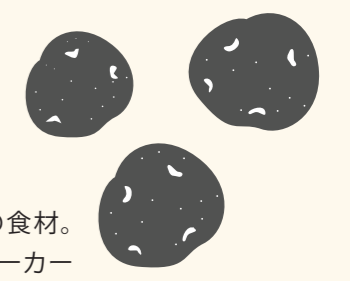
20ページへ!



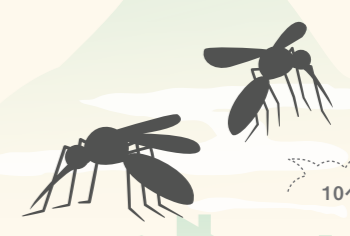
22ページへ!



12ページへ!



8ページへ!



10ページへ!

ジャガイモの 収穫機



機上の選別コンベヤー。少ない人員でジャガイモを容易に選別できる

創業100年 新たな局面へ

日本一のジャガイモ産地と言えば、北海道。一方、世界全体を見てみると、生産量トップは中国、2位にインドが続く。だが、まだまだ農業技術が未熟な地域が多いのが現状だ。そこで立ち上がったのが、数々の収穫機を生み出してきた北海道のメーカー企業だ。

今年2月にパンジャブ州で行われたジャガイモ収穫機のデモンストレーション。試験場のスタッフは短時間で運転を習得した



インドからも熱視線 北海道の味覚を支える技術

日本最大の食料供給基地である北海道には、多くの地元企業が農業の発展を支えてきた歴史がある。長年の事業で培ってきたノウハウを生かすべく、今、ある企業が海外展開に向けた新たな挑戦に

乗り出している。帯広市に本社を構える東洋農機株式会社だ。

明治42年に創業した同社は、畑作の作業機械の製造・販売を行っている。看板商品は、ジャガイモの収穫機だ。最新の技術を駆使し、農地の規模や土壌の性質に合わせた多様なタイプの収穫機を開発。北海道のみならず、本州や九

そのころからインド進出を考えたようになり「と話す。

ジャガイモの生産量で世界2位を誇るインドに、自社製品の活躍の場が広がるチャンスを感じたという大橋さん。善は急げ。まずは、現地の農家や品種改良を行う研究所を訪れ、生産の現状を調査した。だがそこで、日本との大きな違いを目の当たりにした。「インドには、ジャガイモを地面から掘り起こす機械はありますが、そこから先は手作業なんです。何十人もの人が畑に入りジャガイモを一つ一



インドでは掘り起こしたジャガイモは人の手で拾い、麻袋に入れて運んでいる

つ拾って袋に入れていくので、時間がかかるし、ジャガイモにも傷が付きます。しかも、機械の整備不良に伴う掘り残しも多く、改善すべき点が多々ありました」。調査を進める中で、特にパンジャブ州では労働者の賃金上昇と労働力不足が深刻で、機械化に対するニーズが高まっていることが分かった。「現地では、スナック菓子やフライドポテトなど、ジャガイモを原料として扱う食品会社が成長していて、市場が活性化していく可能性を感じました。北海道でジャガイモ産業の発展と共に歩んできた当社としては、それがインドでも、現地の実情に応じた解決策を提供できると確信しました」と大橋さん。すぐにJICAの支援事業に応募し、2014年、同社のジャガイモ収穫機をパンジャブ州で普及させるためのプロジェクトが始まった。

日本市場の 将来を見据え 動き始めた企業

同社が手掛ける収穫機は、ジャガイモを掘り起こした後、機械に備え付けられているコ

ンベヤーで土砂や根葉を分離し、ジャガイモを大きさによって3段階に自動的に仕分ける仕組みとなっている。収穫したジャガイモは機内のタンクに収納して運搬できるため、作業効率と品質の向上が期待できる。

今回のプロジェクトでは、小規模な農地でも対応できるタイプの収穫機をパンジャブ州の研究所に持ち込み、性能試験やデモンストレーションを行った。長年、JICAの研修事業に協力してきた大橋さんは、プロジェクトリーダーを務めることになった。「収穫機の特徴を説明すると、このような機械は見たことがないし、価格も高いと驚かれました。これまで人の手でやっていたので、まず機械を使うイメージを持ってもらうのに苦労しました」と大橋さん。例えば、パンジャブ州では掘り起こしたジャガイモは、収穫前に風に当てて乾燥させる手順を踏んでいた。現地では品質を良くするためと考えられているが、日本では行われていない工程だ。「説明だけではなかなか理解してもらえないので、実際に収穫機を使ってみて、こうした現地の慣行と比較してもらうことから始めています」。

大橋さんはこのプロジェクトを機に、ビジネスとしての展開も視野に入れ、すでに現地のメーカー企業との交渉を進めている。「こ

れから先、日本市場は縮小していくでしょうから、会社が生き残るためには海外にも目を向けていく必要があります。インドでは、作業機械の研究開発はあまり進んでいないので、この分野で当社が貢献できる方法は必ずあると思っています」。

今年2月に行われた製品試験の結果、能率、精度、損傷割合のいずれの面においても、現地で高評価を受けた。プロジェクトは2018年まで続き、今年秋には、植え付け作業のデモンストレーションも行われる予定だ。大橋さんは、「恐れずに行動すること、そして行動したことで得られたさまざまな巡り合わせによって、ここまで来ることができました。北海道の地域性を生かしたこの技術は、きっと世界にも通用すると信じています」と語る。創業100年を超えた企業は、今、さらなる高みを目指して走り続けている。



トラクターでけん引するタイプの収穫機も現地に持ち込まれ、比較的大規模な農家から高い評価を受けた



東洋農機の太田耕二社長(左)も現地を訪れた。写真はパンジャブ州のジャガイモ農家たちと



マヒドン大学のスタッフと宮崎さん(前列左から2人目)。熱帯病の対策に、流行国の協力は欠かせない

「 Dengue熱を引き起こす Dengue ウイルスの血清型には4種類ありますが、一度でもかかった型には免疫ができます。ですから、多くの大人は免疫を持っていてかかりづらく、患者は主に子どもです」。千葉県の株式会社バイオメディカル研究所の宮崎功代表取締役は、そう説明する。

まれに重篤な Dengue 出血熱を起こすこともあるが、基本的な症状は高熱と痛みだけで命に関わることは少ないのが、 Dengue ウイルス感染症の特徴だ。とはいえ、英語では俗に「骨砕き熱」と呼ばれるほど強い痛みがあり、その激しさは時に患者がのた打ち回るほどだ

**蚊の駆除が感染防止の鍵
より確実な駆除活動へ**

Dengue ウイルスの感染拡大を食い止めるには、ウイルスを運ぶ蚊を駆除することが重要だ。1950年代に Dengue 出血熱による死者が出た国の一つ、タイでは、 Dengue ウイルス感染症を撲滅したいという意識が当局でも強く、発生が確認され次第、すぐに駆除チームを派遣するシステムが出来上がっている。問題は、 Dengue ウイルスの感染検査の精度が低く、確定に数日

が必要なことだ。確定診断を待っている間は感染が拡大する可能性が高いため、現在では Dengue 熱の疑いが出た時点で駆除チームを派遣している。短時間で確実に Dengue ウイルス感染の有無が診断できれば、駆除チームの派遣がより効率的になる。宮崎さんは、そのために自社で開発した Dengue ウイルスの簡易検査キットを役立てたいと考えた。現在はタイの保健省と協力し、簡易検査キット「ラビ Dengue・エー1ジー」を使用した全国レベルの検査・駆除体制確立を目指している。

一方、同じくタイのマヒドン大学熱帯医学部とは、検査キットの精度向上などの共同研究を行い、検査技術を供与している。「このところ、日本でも毎年200例以上の Dengue 熱患者が報告されています。これは Dengue 熱だと確定診断された患者の数ですから、実際には10倍以上の人が感染している可能性があります。それでも患者数は少なく、研究するのは難しいのです」。タイでの感染者は通常、年間5〜6万人だが、3〜4年に1回は10万人以上の感染者が出る流行期がある。 Dengue 熱との戦いの最前線とも言えるタイで研究を進めることが、検査キットの改善には不可欠だ。宮崎さんが日本で研究を行って

いるのは、千葉大学医学部のキャンパス内にある中小企業基盤整備機構の千葉大亥鼻イノベーションプラザ。多くのベンチャー企業が入居する、産学連携の拠点だ。1都3県に200校超の大学が集まる学問の府の強みが、ここで生かされている。宮崎さんには夢がある。 Dengue 熱やその他の熱帯病を含む、主要な感染症の一括検査キットの作成だ。「今の検査キットでは、医者がこの病気を検査すると決めたもののしか検査できません。もし、基本的な病気について一括で検査できるようにすれば、早く診断できますし、万が一の見落としも減ります」と宮崎さんは強調する。

Dengue 熱ワクチンは昨年、ようやく世界の市販にこぎつけ、治療もできつつある。その一方で、 Dengue 熱と同じフラビウイルス科のジカ熱など、対策の立ち遅れている熱帯病はまだ数多く残されている。感染症に関する日本と開発途上国の知見の共有は、開発途上国における対策に役立つだけでなく、国境を越えて日本に侵入するさまざまな感染症への備えにもつながる。



タイの小児科病棟で



人の移動が増える中、熱帯病は日本にとっても他人ごとではなくなりつつある

**迅速診断で
効率よい感染防止**

2014年夏、日本でも話題になった Dengue 熱。東南アジアや南米、アフリカなど、一年中蚊がいる地域では、常に感染の危険がある。日本の最先端医療技術が、蚊の効率的な駆除の下支えを目指す。

**子どもにも多い Dengue 熱
看病は母が背負う国も**

首都圏の公園が次々と閉鎖された、2014年の Dengue 熱流行は、多くの人にとって記憶に新しいだろう。 Dengue 熱は Dengue ウイルスにより引き起こされる感染症。開発途上国に集中し、採算が取りづらいなどの理由で医薬品の開発が進まない「顧みられない熱帯病(NTDs)」の一つだ。世界保健機関によると、世界での感染者数は年間1億人近くにも及ぶとされる。



**Dengue ウイルスの
迅速検査技術**



バイオメディカル研究所が製作した、 Dengue 熱の迅速検査キット



関東の宝



配置薬



富山県を訪れたミャンマー伝統医療局の局長(右から4人目)と職員ら。家庭に届ける薬の内容を売薬さん(同3人目)と一緒に確認した

ミャンマーの健康を守る、 富山の配置薬システム

一家に一箱の置き薬。いざという時の常備薬は心強いものだ。江戸時代に富山藩で発祥した配置薬は、日本各地の人々の健康を守ってきた。国内有数の医薬品製造拠点となった富山県は、行政・大学・企業の「オール富山」で、その知恵をミャンマーに伝えている。

「一つの妙薬が生んだ富山の英知 ミャンマーに伝える」

「富山のくすり」には、こんな逸話が残っている。1690年、三春藩(現・福島県)の藩主は、江城で腹痛に苦しんでいた。居合

わせた富山藩の藩主が、印籠から妙薬を取り出し飲ませたところ、うそのように腹痛が治まったではないか。それを見た諸国の大名たちは、その薬を自国でも販売してほしいとこぞって申し出たという。

富山県庁の「くすり政策課」や、富山大学にある、日本で唯一の伝統医学の研究機関「和漢医学学総合研究所(和漢研究所)」は、この地で栄える製薬産業の重要性を物語っている。

糖尿病に効く薬草として、数種類の植物がミャンマー伝統医療大学に展示されていた



富山県の製薬企業の工場を見学する伝統医療局の職員ら



員である売薬さんが、各家庭や企業を回って薬を補充しながら、使った分だけ後から代金を回収する「先用後利」の仕組みが特徴だ。このおかげで、私たちは急な体調不良に見舞われても、手元の薬箱にある薬をすぐに服用することができる。この富山の英知を、ミャンマーの人々の健康維持に生かす取り組みが進んでいる。

富山大学和漢研究所は、2014年からJICAのプロジェクトに協力し、県や地元製薬会社との連携の下、研修員の受け入れなど

を通して、ミャンマーの伝統医薬品の品質改善と、配置薬システムの普及を支援してきた。これに先立つ09年から、公益財団法人日本財団がミャンマー保健省と共に、同国全土の約3万の村落を対象に、伝統医薬品を活用した配置薬システムの普及事業を展開しており、JICAのプロジェクトはこれと連携するかたちで実施されている。

良質の伝統医薬品づくりを 産官学で全面サポート

ミャンマーでは、薬用植物などを使った伝統医薬品を保健省伝統医療局が管轄する国営工場で作っている。だが、同国では偽薬や粗悪品の流通が問題となっていた。「昨年12月に国営工場を視察しましたが、設備は古く、衛生管理も旧態依然としていました。伝統医療局は、当初、私たちの視察に消極的でしたが、有りのままを見せてもらえたことで課題が明確になりました。その話すのは、プロジェクトの総括を務める富山大学和漢研究所の紺野勝弘教授だ。

世界に羽ばたく、薬都とやま、 地元の産業振興を願って

和漢研究所では、12年にも伝統医療局から研修員を受け入れ、伝統医薬品の品質規格書として、20種類の薬用植物の品質基準を定めたミャンマー生薬局方の作成に取り組み、良質な薬づくりを支援している。

今回のプロジェクトでは、伝統医療局の品質検査員2人が、大学だけでなく、県や県内の製薬会社の協力も受けながら、3カ月間、化学分析などによる薬の試験方法について実践的な研修を行った。また、昨年6月には伝統医療局の局長や伝統医療大学の関係者などを含む8人が富山県を訪れた。彼らは、県の薬事研究所などを訪れたほか、製薬会社の工場を見学し、徹底した品質管理の重要性を学んだ。さらに、実際に売薬さんと同行して家庭訪問を体験するなど、配置薬システムの運営方法を身をもって学ぶ機会となった。

富山県厚生部くすり政策課の藤岡俊太郎さんは、「途上国支援をはじめとする薬の国際展開は、地元の基幹産業を活性化する上で重要です」と話す。昨年6月には、研修員が訪問する時期に合わせて、ミャンマーの医薬品業界を取り巻く環境などについて考えるシンポジウムが開かれ、県内の製

薬会社などから70人以上の参加があった。

国内マーケットに代わる薬産業の進出先として、ミャンマーへの関心が高まる一方、現地には課題もある。国営工場で作られる伝統医薬品を収めた薬箱は、一箱10ドル。家庭で気軽に買える値段ではなく、現在は、日本財団の支援の下、伝統医療局から村ごとに一箱が提供されている。「富山の配置薬の特長は、先用後利」の仕組みによるビジネスとしての継続性です。将来的には、民間企業の活躍も期待しています」と紺野さん。

富山県は、この他にも、昨年11月にJICA東京が厚生労働省や公益社団法人国際厚生事業団と連携して行った、医薬品の適正な供給管理を目指す研修で、ブラジルやイラクなど9カ国の薬剤師と薬事行政官を受け入れた。同研修への協力は30回を数える。

行政、大学、企業がそれぞれの医薬品分野の知見を生かしながら、産官学の「オール富山」で世界に貢献する富山県。紺野さんは、「地元の経験を生かし、世界の人々の健康を守ることに貢献できればと思います」と、配置薬システムと定着に意欲を見せる。地域の英知・配置薬システムを通じて築かれる富山県とミャンマーのつながりは、それぞれの地を一層明るく照らす宝となるだろう。



ミャンマーの伝統医薬品について説明を受けるプロジェクトチーム



富山県厚生部くすり政策課の藤岡俊太郎さん(左から2人目)らとミャンマーを視察した紺野さん(左から4人目)。伝統医療局の職員らと共に



ずらりと並ぶ紅茶のサンプル。現在は、一つ一つ味見をして判断するしかない



紅茶の加工場も食品安全認証を取るなど、輸出品としてのブランディングに積極的

見直される紅茶作り 新たな魅力で付加価値を

かつて、日本でも紅茶が盛んに作られていたことを知る人は、どれほどいるだろうか。

「緑茶はもちろん紅茶の生産も、開国以来、輸出を視野に奨励されてきました。しかし、1971年に紅茶の輸入が自由化されると、海外から良質な紅茶が入ってきたため、国内の紅茶生産は減っていったのです」と静岡県農林技術研究所・茶業研究センターの後藤正さんは話す。「静岡でも、たくさん紅茶を作っていました。『べにふうき』や『からべに』など、紅

が付く茶の木の品種は、もともと紅茶用なんです」

近年では、ペットボトルのお茶の普及など、ライフスタイルの変化に基づく高級茶の需要減少が、茶農家の悩みの種になっている。そこで、静岡県の茶業研究センターが推進しているのが、付加価値の高い紅茶や半発酵茶（ウーロン茶など）の生産だ。センター内に紅茶、半発酵茶、釜いり茶など、煎茶以外の製造に必要な機械を整備し、新商品の開発を支援している。日本全国で紅茶の生産が増えつつある中、静岡の紅茶生産量は全国トップの水準だ。

それと並行して、紅茶の生産国との交流を通してよりよい茶作りを目指しているのがカワサキ機工株式会社だ。1905年創業の同社は、茶摘みに使う乗用型摘採機や加工機などを手掛ける、茶処・静岡ならではの企業。「日本で飲むお茶の3杯に2杯は当社の機械で加工されたものです」と枝村康生社長が言う。同社、同社の製茶機械の国内シェアは6割に上る。

「アミノ酸が多く、食物繊維が少ないのがおいしい緑茶だ」ということが、これまでの研究で分かっています。成分を分析することで、お茶の品質を客観的に評価



印刷された分析結果を基に、スリランカの関係者に解説した後藤さん

「日本の茶処」が積み上げた知恵 紅茶の品質向上に活躍

日本のお茶の4割を生産する静岡県。国内消費の変化に対応するため、紅茶をはじめとした新たなお茶作りの取り組みが進む。そのパートナーは、世界有数の紅茶の国、スリランカだ。



温暖なスリランカでは、一年中茶摘みができる。一つ一つ手で摘む高い品質の茶葉が強みだ

「できるのです」とカワサキ機工の志村裕也さんは話す。

緑茶と同様に、「高品質の紅茶」を成分で見分けられるようになれば、紅茶産業の後押しになる。そこで同社は、98年から日本国内で稼働している茶成分分析計を使い、紅茶の名産地、スリランカで、紅茶の品質管理支援と、「よい紅茶」の科学的な分析を目指す取り組みを開始した。

品質の評価は人間頼り 機械の味見に期待

スリランカの紅茶は、全輸出額の15%を占める一大産業だ。同国内で生産された紅茶の95%が紅茶市場でのオークションを通して世界に流通している。「国が積極的

に産業振興に関わっているのが、スリランカ茶業の特徴です」と、調査を担当した株式会社日本開発サービスの西崎紘史さんは話す。また、同国産紅茶の9割以上が輸出されているため、多くの農場がISO22000（食品安全に関する国際標準規格）やHACCP（国連発の食品安全規格）などの国際認証を取得している。その一方で、品質評価は人の五感に基づく官能検査に依存しているのが現状だ。国中から集まる紅茶のサンプル数は週あたり1万を超え、紅茶局が持つ化学分析機器では1日に10サンプル程度を分析するのが限界。残りは昔ながらの人の感覚に頼らざるを得ないのだ。「紅茶局はもちろん、バイヤーたちも、購入や値付けのためには大量のサンプルを味見するしがあります。客観的な指標を示せる茶成分分析計は、まさにスリランカが求めているものなのです」と、日本開発サービスの安田高法さんは説明する。

「当社の茶成分分析計は、粉碎した茶葉をセットすれば15秒で結果が出ます。迅速に、数多くの茶のサンプルを分析することで、紅茶の品質評価に活用できます」と、カワサキ機工の室屋昭彦さんは導入のメリットを強調する。

一方、静岡の製茶業界にとって、輸出作物としての積極的なブ

ランディングに取り組むスリランカの体制は貴重な参考になる。かつて、静岡で紅茶の生産が減少するのを目の当たりにした後藤さんは、「スリランカでは、輸出産業として茶の生産に取り組む方々の生の声を聞くことができました。スリランカで得た知識を静岡に届け、日本の技術をスリランカに届けることで、両国の茶産業の振興に寄与できればと思います」と意気込みを語る。

「お茶はそのままでは消費できませんから、茶葉の生産・加工だけでなく、茶缶のような容器や包装などの関連産業が生まれます。静岡茶の振興は、地元全体の経済活性化につながるのです」と、茶業研究センターの早川隆弘センター長は話す。3月には、スリランカの紅茶輸出関連業者を対象に、茶成分分析計を活用した品質管理に関するセミナーを開催。また、静岡県立大学茶学総合研究センターの中村順行センター長の協力を得て、茶成分分析計の普及に向けて現地のバリエーションやマーケットなどの調査も開始した。

茶畑の周りのスキなどの草を刈って木の根元を覆う、掛川の伝統的な「茶草場農法」は、2011年、国連の世界農業遺産に指定された。伝統の静岡茶を、世界の市場へ。紅茶大国スリランカとの絆が、新たな可能性を開いている。



一瞬で成分を分析できるカワサキ機工の茶成分分析計。お茶のおいしさを科学の目で判断する



静岡茶に秘められた新たな可能性を開花させるため、茶農家の試行錯誤が進む



お茶の成分分析計

東海の宝



ブータンで行った技術指導の様子



島根県
浜田市

ブータンの伝統紙に 石州和紙の知恵

石州和紙協同組合・代表理事

久保田 彰さん

島根県浜田市の石州和紙は、1300年の歴史を持っています。コウゾ・ミツマタ・ガンピの繊維を原料とし、トロロアオイという植物から作る補助剤を加えた液を竹簀に入れ、繊維を絡み合わせながら紙の層を作ります。こうして作られる和紙は、とても頑丈です。

ブータンにも数百年続く伝統の手すき紙があります。でも、伝統紙を作っている東ブータン・タシヤンツェ県の農家では、副業としての生産にとどまり、紙の品質にもばらつきがありました。東ブータンは他の地域に比べて生活水準も低いことから、同国政府は、伝統紙の品質向上と商品化による産業振興を目指しているのです。

石州和紙協同組合は、2013年から同国経済省家内小規模工業局に協力し、主に現地の農家を対象に手すき紙作りの技術指導や商品化に向けたサポートを行ってきました。ブータンの手すき紙は、黒っぽく艶やかな美しさを持っています。指導にあたっては、日本式の技術だけを教えるのではなく、ブータンの伝統紙独自の良さを大切にしながら、品質の向上を目指してきました。現地で開催した技術指導のワークショップに、徒歩で片道3時間かけて参加してくれた人がいたことは印象的です。この他、浜田市でも研修を実施し、石州和紙の製造法や原材料の栽培・採取の方法などを伝えました。

プロジェクトをきっかけに、農家主体の紙組合の設置も実現。今後、製品開発や販路開拓に向けて、一層活発な取り組みが行われていくことを期待しています。



青森県
藤崎町

ウズベキスタン産の 高品質なリンゴを

弘前大学農学生命科学部・教授

荒川 修さん

青森県といえば、リンゴ。藤崎町は、甘味と酸味のバランスや貯蔵性の良さが特徴の“ふじ”発祥の地で、その栽培に長い経験と高い技術を持っています。以前、JICAが果樹栽培の技術向上のプロジェクトを行った際、専門家がふじを現地に紹介したことから関心が高まり、今、ウズベキスタンではふじの栽培面積が増えています。しかし、リンゴの品種や栽培技術、販売システムは旧ソ連時代のみで、改善が必要です。そこで、長年のリンゴ栽培経験と熟練の技術を持つ藤崎町の農家が協力し、昨年3月から、ウズベキスタンの農務省や農業大学、果樹栽培研究所の関係者らを招いて研修を実施しているほか、現地での指導も行っています。

活動の目標は、ウズベキスタンのリンゴ栽培技術が向上し、より品質の高いリンゴを生産できるようになること、その販売を通じて農家の生計が向上することです。弘前大学は、日本の技術をウズベキスタンに適應させるべく、研修や技術移転に関する効果的な教育プログラムを立案したり、栽培技術や流通販売技術の向上を科学的な観点からサポートしたりしています。

研修員たちは大きく立派な日本の高品質のリンゴに驚き、その技術を学ぶ姿も真剣そのものです。今後は、彼ら自身が現地の大学生や農家に、講義や実技を通して栽培技術を伝えていけるよう、指導的な役割を担う人材の育成に取り組む、より多くの農家に近代的な技術が広がることを目指しています。



[上]高品質のリンゴを作るには、枝の剪定作業も重要だ
[下]昨年11月、研修員らは藤崎町でふじの収穫技術を学んだ



神戸市で行われた演奏会。Irisと芥川高校和太鼓部、JICA和太鼓クラブのコラボが実現した



大阪府

和太鼓の 音色がつかないだ絆

アイリス
和太鼓チームIris・リーダー

中塚 咲さん

私たちIrisは、大阪府立芥川高校・和太鼓部の卒業生で結成している和太鼓チームです。結成のきっかけは、今から7年前の高校3年生のとき、授業で世界の貧困について学んだことです。自分たちも何かできることをやりたいという思いを和太鼓部の仲間と話したら、みんなが賛同してくれて、チャリティーコンサートを開催することになりました。

最初の目標は、コンサートで集まった募金で、バングラデシュとネパールに井戸を造ること。全てが一からの挑戦でしたが、学校の先生、地元のNGO、会場を無償で貸してくれた方など、多くの人の協力のおかげで2回のコンサートを開くことができ、合計30万円ほどの募金が集まりました。その後、それぞれの国から完成した井戸の写真が送られてきたときには、胸が熱くなる思いでした。

今では活動の幅が広がり、年に約30回の演奏会を行っています。また、来日中のJICA研修員で結成されたJICA和太鼓クラブに、定期的に指導を行っています。最初はなかなか言葉も通じず、どのように教えたらいいのかわかりませんでした。そんなとき、硬い表情で演奏している研修員の方々を見て、まずは日本の伝統楽器を心から楽しんでもらうことが一番大切だと気付いたのです。難しく考えず、ただどよみ英語でも和太鼓の魅力を伝えようと努力していくうちに、自然と笑顔が生まれました。

これからも、和太鼓を通じて生まれたたくさんの絆を絶やさずにつないでいき、チームとしてもさらなる飛躍を目指します。

特集地域の宝
おらがまちの世界一

世界とつながら

地方の宝

おいしい！美しい！感動的！
日本の地方には、数々の宝がある。
世界に発信されているそんな地方の宝をご紹介します。



石川県
輪島市

漆と共に 成長するまちを

カブレット
輪島 KABULET・マネージャー

有泉 仁美さん



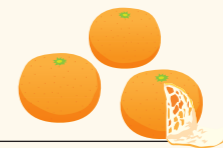
漆製品について地元の人から聞き取り調査を実施

石川県輪島市は、国内の他の地方と同様、少子高齢化や過疎化などの問題を抱えています。こうした問題に官民連携で取り組んでいこうと昨年立ち上がったのが、「漆の里・生涯活躍のまちづくりプロジェクト（輪島KABULET）」です。

輪島KABULETは、世代や文化の垣根を越えて、「人」を主役としたまちづくりを目指すプロジェクトで、この取り組みを推進する役割を担うことになったのが、私たち青年海外協力隊の経験者12人です。管理栄養士、保育士、木工、野菜栽培、青少年活動など、幅広い分野の人材が全国から集まり、輪島市に移住しました。今は、市内の空き家を活用して、高齢者向けの住宅やグループホーム、子育て世代の母親の交流施設などを整備するという目標に向けて、それぞれが持つ資格や職種と、それに関連する地元の人々とのつながりを構築するべく日々奮闘しています。

また、今私たちが構想を練っているのが、地元の伝統工芸である「輪島塗」に代表される漆を生かしたまちづくりです。漆産業の関係者の方の意見も聞きながら、漆の植栽や採取を将来的にも仕事として継続していけるか、漆を使ってどのような製品を生み出せるかなどを検討しています。

プロジェクト開始からまだわずかですが、徐々に地元の人たちの期待も高まり、協力者も増えてきました。見知らぬ途上国の地で、現地の人たちと何かをやり遂げた隊員時代の経験を、今度はここ輪島市で生かすときだと思っています。



有田みかん



昨年、シンガポールでプロモーション活動を行った大浦さん(右)。中には、「マンゴーみたい」と驚く客もいるほど、まろやかな口当たりだ

タイの小さな村で 特産品を生み出した男性

「糖度が異なる3種類のみかんジュースを作っています。ぜひ飲み比べてみてください」

2月中旬。外の寒さとは打って変わり、大勢の人たちの熱気に包まれた東京国際展示場に、和歌山県・株式会社早和果樹園の営業部長、大浦靖生さんの姿があった。この日、全国の食品業界の関係者

が集う大規模な商談展示会が開かれ、各ブースの出展者が自慢の商品をアピールする中、大浦さんも地元ブランド「有田みかん」を使った商品を懸命に売り込んでいた。「私たちのジュースは、みか

早和果樹園は、1979年に有田市の7軒のみかん農家が立ち上げた「早和共撰組合」を起源として始まった。当初はみかんの生産・販売のみ行っていたが、2003年から加工品作りにも取り組み、今ではジュースの他にも、ゼリー

やジャムなど約20種類の商品を手掛けている。そんな同社が次なるステップとして挑んでいるのが、海外販路の拡大だ。

中心となっている大浦さんは、実は意外な経歴を持つ。「実家が組合の立ち上げメンバーでもあるみかん農家なので、自然に後を継ごうと考えていました。ただ、社会を知らずに継ぐと、自分の世界が小さくまとまってしまう気がして、もう少し外に出て見聞を広めたいと思ったのです」。そこで、農業系の大学に通っていた大浦さん

が応募したのが、青年海外協力隊だ。選考試験を見事突破し、卒業後、タイ・チェンライ県にある山岳民族の村に果樹栽培を教える隊員として飛んだ。

任務は、村で盛んに行われてきたアヘン栽培に代わる生計手段を確立させること。大浦さんは、桃や柿、梨などの落葉果樹を中心に、枝の切り方や堆肥の作り方などを農家に指導した。そんな中、村にあるもので食品加工に挑戦したいという話が村人の会議で持ち上がり、大浦さんは、インフラが整っていない

い村でも比較的安定した収穫を見込める梅に目を付けた。「バンコクには多くの日本人が住んでいるので、日本食のスーパーやレストランも豊富です。品質の良い梅干しを作れば、その日本人市場で売れるのではと考えたのです」。

普段、村で収穫された梅はそのまま業者に出荷されるため、ほとんどの村人が梅干しを食べたことがない。最初は、「酸っぱすぎる」「砂糖が必要だ」などの意見も出て大浦さんも不安だったというが、意欲的な農家たちが手を挙げ、無農薬栽培で作った梅干しに加え、練り梅や梅シロップを完成させた。その後、日本食を扱うスーパーで販売が始まり、タイ政府が認定する「一村一品」の製品にも選ばれた。「村人を連れて実際の売り場を見に行つたときは、みんな本当にうれしそうでした」と大浦さんは振り返る。

地道な活動と情熱が 世界への道を切り開く

帰国後は地元に戻り、早和果樹園に入社した大浦さん。初めは生産部門を担当していたが、その後、営業部門に転向した。最近では、海外のバイヤーと直接話す機会も増え、隊員時代の経験が生きてくることを実感するという。「もともと私は、外に出ることを億劫に感じる内気な性格だったんです

今こそ海外経験を生かすとき

みかんの収穫量が日本一の和歌山県。県中部に位置する有田市には、地域ブランドとして知られる「有田みかん」のおいしさを、世界に広めようと取り組んでいる企業がある。大きな夢を抱く企業の挑戦に迫った。



[右] 有田市の山の斜面に広がるみかん畑での収穫風景
[左] みかんの味を最大限に生かしたさまざまな加工品。みかんを使ったケチャップやうどんも販売されている



隊員時代のタイでの梅干し作りの様子。大浦さんの任期終了から10年以上がたった今でも、現地での製造・販売が続いているという



1995年に経済援助としてフィリピン政府にサタケ高性能精米プラントを寄贈。ラモス大統領(左)と三代目・佐竹寛(中央)、現代表・佐竹利子(右)が会見した

あらゆる地域で生産される色や形の異なる米が、ずらりと展示されている。「全世界で毎年約7億トン生産される米の8割は、長粒種と呼ばれるもので、日本の短粒種と違い、細長くて粘りが少ない米です。私たちは、品種ごとの特徴に合わせて開発した精米機械を世界に提供しています」。そう説明するのは、同社国際事業本部海外統括室の平世貴哉さんだ。

中国やブラジル、タイ、アメリカなど、先進国、開発途上国を問わず世界各国に子会社を持つサタケでは、現地で生産した加工機械の運転や維持管理のサポートのため、いくつかの地域にトレーニングセンターを構え、第三国の拠点からも人材を受け入れて指導を行っているという。

こうした自社事業としての独自

近年では、米を主食としているものの、自給率が低く、その改善が課題となっているキューバから、農業省や米種子の研究機関の職員が同社の穀物乾燥施設の視察に訪れている。JICAは、同国で米種子の栽培技術の向上や生産拡大を支援しており、これとあわせて、日本国内でもサタケをはじめとする米関連機関の協力を受けた研修を実施。研修員は、サタケの穀物乾燥施設の視察を通して、米種子生産に関する設備の運転や整備に役立つ知識を学んだ。

の取り組みに加え、73年からはJICAの研修事業に協力し、2014年までに累計1000人以上の途上国の米産業に関わる人材の育成に貢献してきた。「米の加工は精米だけではありません。収穫後は、まず乾燥させ、それから石を取り除いたり、もみ殻を取ったりと、さまざまな工程があります。協力を始めた当時の研修では、そうした作業に使う機械の取り扱い方を中心に講義を行っていました」と平世さん。



JICAの研修としてサタケで精米加工技術について学んだ研修員ら。米のおいしさの基準や食べ方は、国によってさまざま

サタケは、このような直接的な協力だけでなく、お湯や水を入れるだけで食べられる自社開発インスタント米の「マジックライス」を、スマトラ沖地震やミャンマーのサイクロンなどの災害時に非常食として届けるなどの支援も行ってきた。

地域に伝えたい、米のこと

米加工技術のバイオニアであるサタケは、地元・東広島市とのつながりを大切にする企業でもある。さらに、県の教育委員会に働き掛けて、05年からは主に小学生を対象とする食育プログラム「お米の学校」も実施。その背景について、経営本部広報室長の宗貞健さんは、「米の加工に関わる工程を知ってほしいという思いに加え、米の消費量の減少や、それによって引き起こされる生活習慣病の増加などに対する問題提起の狙いもあるのです」と話す。地元のケーブルテレビ局と共同制作している食育や環境に関する教育番組は、このような思いを地域住民により広く伝えるために始めた取り組みだ。

米の加工技術を最大の強みに、世界に事業を展開するサタケだが、実は、精米機用の動力研究から転じたモーター製造や、バイオマス発電プラント機器の製造も手掛けるなど、多分野の事業を展開していることも興味深い。

一粒の米に全てをかけるサタケは、精米機を原点に、地元と世界に貢献し続けるユニークな企業だった。

1990年から続く酒まつり。サタケ本社会場の商品ブースを訪れた地元の人々



食育プログラム「お米の学校」でサタケ本社を訪れた地元の小学生ら。精米の原理を学んだ



日本初の動力式精米機の生みの親

日本人の食生活に欠かせない艶やかでおいしい白米。でも、ご飯は最初から白いのかというと、もちろんそうではない。収穫後、もみから取り出した玄米は、ぬかに覆われて茶色く、それを内側の白

い部分まで削る作業を精米という。この他にも、さまざまな加工工程を経て、米はようやく私たちの見慣れた「白米」となる。

そんな米の加工に関わる全ての技術を網羅する株式会社サタケは、120年の歴史を持つ広島県東広島市の企業だ。創業者の佐竹利市は、1896年に日本で初め

世界で愛用される精米機を造り続けて

日本をはじめ、米を食べる国や地域は多い。世界には、実に1000種類以上もの米があるという。日本初の動力式精米機を開発した広島県東広島市の企業は、精米機械を中心とするあらゆる穀物の加工技術で、世界の農家や食卓を支えている。

ての動力式精米機を考案し、生産・販売を始めた。すると、それまで人力だった精米作業の効率が飛躍的に向上し、農業はもとより、酒造業の発展にも大きく貢献したのだ。

同社は、1939年に満州サタケ製作所を設立して以降、精米機の販売を各国に展開。現在、精米機は世界トップシェアを誇り、東南アジア諸国の中には「SATA KE」が精米工場を意味する言葉として使われている地域もあるという。精米機の他にも、不良粒や異物を選別・除去する高精度の選別機「ピカ選」など、同社の技術は生産者と消費者の安心・安全を守るために活躍している。

米の加工技術で世界の食を守る

サタケ本社の一角には、世界の



タイの精米工場に設置されたサタケの精米機器



精米機



梅栗植えて、 世界へ飛翔

切り立った山に挟まれた谷間の小さな農村、大分県日田市大山町。大規模な耕作地がないからこそ、ここにしかない名産品を生み出し、発信してきた。逆張りの戦略は、JICAが世界中で展開する「一村一品運動」の原点だ。



大山町は切り立った山に挟まれた土地。平らな耕作地はわずか、多くの果樹畑は傾斜地にある



地元の農家が数多くの「おもてなし料理」を提供するレストラン。平日も大盛況だ

「木の花ガルトン」の直売所には、大山町の農家が作るさまざまな品物が並んでいる



梅干しは、梅を加工して付加価値を付けたもの。大山町農協の戦略の原点だ

「壁」に囲まれた小さな町 裾野ははるか世界へ

高い壁に囲まれた町で、外の世界に憧れを描く少年エレン——人気漫画『進撃の巨人』の作者、諫山創さんが作品の構想を得た風景が、大分県にある。阿蘇山を水源とする大山川の流れに沿って、小

さな田畑と山がひしめく日田市大山町。『壁』という表現にたがわぬ山のふもとから見上げると、迫りくる山影と、その向こうに広がる空のコントラストに圧倒される。

「大山町の農家1軒あたりの耕地面積は、平均40アール。しかも、一枚の田畑ではなく、10枚、20枚

という細長い耕作地が、切り立った斜面に点在しています」と説明してくれたのは、大分大山町農業協同組合の矢幡建治参事だ。40アールといえば、北海道を除く全国平均（1・55ヘクタール、2014年農林水産省調べ）と比較しても約4分の1にすぎない。狭い土地でどんな農業をすればいい

か。1962年、大山町農協の組合長だった矢幡治美さんが提案したのは、土地に合った特産物の創出だった。「梅栗植えてハワイに行こう」のスローガンの下、斜面での生育に向き、商品単価も高い梅や栗、スモモなどの果樹育成を奨励し、農家の収入向上を実現した。

大山町の取り組みは、その後、大分県全体で「一村一品運動」として展開され、一躍有名になった。

今ではJICA研修事業、技術協力プロジェクト、青年海外協力隊などを通じて、世界中の途上国の地域振興活動として広がっている。海外に赴任する協力隊員などの研修も担当している矢幡建治さんは、「よその人の意見を参考に、自分たちの町の良いものに気がつき、それを発信していくことが、一村一品運動の基本です」と話す。

人と地域を育てるために 都会との交流を促進

大山町農協では、地元農家の作物や加工品を直接、消費者に販売する直売所「木の花ガルトン」を90年に開店した。ケース単位で出荷しなければ流通に乗らない通常の販売経路とは異なり、ガルトンではわずかな量の作物でも販売できる。「自分で作ったものが自分で付けた値段で売れることは、生産者にとっては喜びであり、新し

い挑戦のきっかけとなります。そのため、都会の人たちとの交流が大切なんです」と矢幡建治さんは強調する。現在は大分・福岡の両県の都市部に計9店の直売所を展開するほか、2001年には地元農産品を使って農家の人たちが料理を作るオーガニックレストランも開店し、大分県内はもちろんです。隣接する福岡県や熊本県などからも多くの客が訪れている。

農村と都市の交流をさらに進める試みとして、昨年、開園したのが「五馬媛の里」だ。豊後国風土記に名を残す五馬高原の統治者の名を冠したこの場所は、五馬媛が祭られている玉来神社を頂点に、集会所としての庄屋の家や古代米を育てる水田、梅や桜、スモモなどの木々を植林した山々などで構成される。よみがえった山里。大山町農協は、この場所を都会の人が季節の移り変わりを楽しみ、体験農作業にも挑戦できる「農業者のテーマパーク」として展開していく予定だ。

「昨年、あるイベントを予定していた日に雨が降ったのですが、イベント中止をお知らせしても、やりたかったと都会からわざわざ足を運んでくれる人が多かったんです。私たちにあって日常にすぎない農作業が、都会の人にとっては特別なことなのだ実感しました」と話すのは、五馬媛の里の運

営に携わる大山町農協の高瀬八郎さん。里では、木々を植えた山に遊歩道を作り、休憩所などを整備すると同時に、里のすぐ脇で今も耕作を続ける地元の人たちとの交流や、玉来神社を中心に受け継がれてきた伝統芸能、祭りなどの文化の継承も行っていく予定だ。

こうした活動の背景には、農村の過疎化に対する強い危機感がある。大山町は農家の収入向上を皮切りに、体験学習や国際交流などを通した人づくり、若者にとって魅力のある暮らしやすい街づくりなどを積極的に展開してきた。現在600戸の農家は高齢化が進んでいるが、Uターンする若い世代や、就農を希望する都会出身の人々も少しずつ増えている。町の将来を担う若い人たちに對して、ただ空き家を提供するだけでなく、生活しやすい環境を作って定着につなげるのが狙いの一つだ。

高瀬さんは「人が離れた家に、そのまま新しい人を入れても、定着にはつながりません。新しい人がここに住み続けたい、ここで農業を営みたいと思う場所にしていかねければならないはずだ」と強調する。



山を整備し、梅や桜などの植林を進める五馬媛の里。庄屋の家や玉来神社など、農村ひとつを丸ごと包み込む「農業者のテーマパーク」だ



庄屋の家は現在、集会所やイベント会場として使われている



五馬媛が祭られる玉来神社

九州
沖繩
の
宝

一村一品運動



協力隊として、マレーシアの山奥に住む村の女性たちに手芸品作りの指導をしていた不動田さん

民間企業の力を開発課題の解決に生かしたい

日本国内には380万を超える企業があり、技術を生かして日本経済を回している。その力を社会のために、世界のために使えないだろうか。企業ならではのパワーとスピードを開発現場で生かすために汗を流しているのが不動田朋浩さんだ。

ボランティア時代に企業と連携 その成果が活動を後押し

私は大学卒業後、当初は広告代理店に勤務していました。民間企業のパワーやスピードを実感する仕事だったので、企業の力に感心する一方で、物足りなさも感じていました。社会の役に立つことがしたいと考えて、青年海外協力隊に参加しました。

村落開発隊員として派遣されたマレーシアでは、山村に住む人たちの生計向上に取り組みました。私が派遣された地域の住民は、マレーシアを代表する農産品であるゴムの生産で生計を立てていますが、地域一帯が自然公園として保護されているので、本来は木を伐採してゴムの木を植林することは禁止されているのです。天然ゴムに代わる新たな収入源を作ってほしいというのが、現地の要望の一つでした。

そこで、私は現地に進出していた日系企業の助力を仰ぎ、手芸品作りを推進することを思いつきました。ある企業にお願いに伺うと、二つ返事でミシンを提供してくれたのです。決断のスピード感は、やはり民間企業ならではのものです。民間企業とボランティアが力を合わせれば、社会に大きな利益をもたらすはずだと確信したのは、この時です。

こうして協力隊の活動に打ち込んでいたころに、お世話になったJICA職員の方

に中小企業連携の仕事があると勧められ、帰国後、JICAに就職しました。

日本企業の技術を生かし 開発課題を解いていく

現在の仕事は、中小企業の提案を受け、その企業の技術やサービスを活用して進出したい国の課題を解決することです。企業が持つ製品を、現地の事情に合わせてカスタマイズし、課題解決に生かすのですが、企業の力や技術にはよく感心させられます。

例えば、日本ではマグロ漁の際、船を走らせながら漁をしますが、ベトナムでは燃料代を節約するために船を止めて漁をするのです。それを聞いた日本側の企業が、すぐにベトナムの事情に合わせたマグロ漁獲用機材の開発に踏み切り、交渉の中でいつしか国境を超えた「漁師」としての関係を築いているのは驚きでした。

現地のニーズを即座に反映するには、企業の機動性や柔軟性はもちろん、現地のJICA事務所やJICA専門家の視点が重要です。また、国内各地にあるJICAの国内機関が広報活動を展開し、優れた技術を持つ地元企業をフォローしていることも後押ししています。地元で詳しい国内機関に詳しい専門家が職員など、それぞれのプロがいるからこそ、新しいアイデア、課題



JICA国内事業部
中小企業支援事業課
主任調査役

不動田 朋浩
FUDOUTA Tomohiro

大学卒業後、広告代理店に勤務。民間企業の力と社会貢献を両立させることを目指し、青年海外協力隊でマレーシアへ。村落開発隊員として活動後、2014年より現職。



インドで日本企業からイチゴ栽培の技術指導を受ける現地の人たち

の解決方法が生まれてくるのだと思います。JICAの中小企業支援は2012年に始まり、今は先達が作り上げてきたシステムの中身を充実させる時期だと思っています。企業にとって、利益の確保と開発課題の解決を両立するのは簡単ではありません。最近では企業の社会的責任(CSR)や共通価値の創造(CSV)という考え方が広まりつつありますが、専門的な研究はまだこれから。この分野のケーススタディーなどを通じて、知見を積み重ねていきたいと考えています。

北岡理事長がフィリピンを訪問 平和定着の重要性を再確認

01



ミンダナオの道路起工式典でスピーチを行う北岡理事長



ジャーファームMILF副議長(前列右から二人目)と握手する北岡理事長

この事業は、農村と市場をつなぐ道路を整備することで、農産物の輸送効率の改善や、住民の生活改善を目指すものです。さらに、利便性の向上により、

この事業は、農村と市場をつなぐ道路を整備することで、農産物の輸送効率の改善や、住民の生活改善を目指すものです。さらに、利便性の向上により、

この他、フィリピン沿岸警備隊を訪れ、過去に供与した通信システムや設備などを視察し、日本による長年の協力が同国の海上保安能力強化に貢献していることを再確認しました。

その後、北岡理事長は、モロ・イスラム解放戦線(MILF)のジャーファーム第一副議長らとも会談し、今後の課題や支援の在り方について意見を交わしています。

北岡伸一JICA理事長は、3月1日から4日にかけてフィリピンを訪問し、ベニグノ・アキノ3世大統領と会談したほか、ミンダナオ島で実施中のJICA事業の起工式に出席しました。

地域のムスリム、キリスト教徒、先住民の各コミュニティの集落間の往来が増え、宗教を超えた平和的共存に寄与する事業となることが期待されています。

アキノ大統領は、ミンダナオ紛争影響地域に対するJICAの支援に謝辞を述べるとともに、同地域の包括的和平合意が次期政権でも継続され、早期に新自治政府の基礎となるバンサモロ基本法が成立することの重要性を強調。加えて、マニラ首都圏の「南北通勤鉄道事業」などに言及し、同国の持続的な成長を実現するためには、インフラ整備が不可欠だとの見解を示しました。

北岡理事長は起工式で、これまでの和平プロセスを振り返るとともに、ミンダナオの平和定着のためにJICAが現地の人々に寄り添いながら支援を続けていくことを表明。バンサモロ開発庁のモハマド・ヤコブ事務局長は、「待ち望んでいた事業の起工式を迎えられて夢がかなった」と喜びを表し、和平プロセスの継続と経済社会開発の推進に意欲を示しました。

モロッコでインクルーシブな農業振興を支援

02



署名を取り交わす戸島モロッコ事務所長(左)とプーサド経済・財政大臣(中央)

引続き同国の農業セクター改革を促進していきます。

この他、フィリピン沿岸警備隊を訪れ、過去に供与した通信システムや設備などを視察し、日本による長年の協力が同国の海上保安能力強化に貢献していることを再確認しました。

その後、北岡理事長は、モロ・イスラム解放戦線(MILF)のジャーファーム第一副議長らとも会談し、今後の課題や支援の在り方について意見を交わしています。

JICAは3月4日、モロッコ政府との間で「緑のモロッコ計画(農業セクター改革)支援プログラム」を対象に163億4700万円を限度とする円借款貸付契約に調印しました。

モロッコ経済において農業は重要なセクターですが、多くは雨水に頼る小規模農家で、干ばつ時には収穫量が通常の半分程度に落ち込むなど、生産高は不安定です。加えて、地方農村部は、同国の貧困人口の大半を抱えていることから、一層の雇用創出とインクルーシブ(包摂的)な農業振興が必要とされています。

フィジーのサイクロン被害に国際緊急援助

03



引き渡し式の様子(左から中郡臨時代理大使、タンギザキンバウ西部行政区長官、澤田所長)

今回供与した援助物資は、同国の国家災害管理局と災害対策本部を通じて、被災者に届けられます。

中郡臨時代理大使は引き渡し式で、被災者に対するお見舞いの言葉とともに、一刻も早く人々が安定した生活を取り戻せるよう願う旨を述べました。一方、タンギザキンバウ西部行政区長官は、迅速な支援に感謝し、物資を計画的に配布していくことを強調しました。

中郡臨時代理大使は引き渡し式で、被災者に対するお見舞いの言葉とともに、一刻も早く人々が安定した生活を取り戻せるよう願う旨を述べました。一方、タンギザキンバウ西部行政区長官は、迅速な支援に感謝し、物資を計画的に配布していくことを強調しました。

緊急援助物資の第一便は、2月26日に同国西部のナンディ空港に到着。翌27日午前11時より、同空港で物資引き渡し式が行われました。引き渡し式には、フィジー側からマナサ・タンギザキンバウ西部行政区長官が、日本側からは、中郡錦蔵在フィジー日本国臨時代理大使と澤田寛之JICAフィジー事務所長らが出席しています。

限界集落で生まれた米 ローマ法王のもとへ

羽咋市は、日本海に突出する石川県・能登半島の根元の西側に位置し、呂知瀨低地の平野部を囲んで海手山手に集散しています。金沢の市街地からは、JR七尾線で約1時間。人口2万2600人ほどの小さな市です。

そんな私たちの市が一躍脚光を浴びるきっかけとなったのが、過疎化に悩まされ、限界集落と言われた神子原地区で作られる「神子原米」のブランド化の成功でした。そのストーリーを描いたTBS系ドラマ「ナポレオンの村」をご覧になった方も多いでしょう。

神子原地区は、神子原町・千石

町・菅池町の3つの集落からなる人口わずか440人ほどの地域で、高齢化も進み、活気を失っていました。当時の市長は、「羽咋市にあるものを使って、ブランドをつくらう」とうたっており、当時、羽咋市役所の農林水産課に勤務していた高野誠鮮が、神子原地区の棚田で、生活排水の混入しないきれいな水を使って作られる「神子原米」に目を付けたのです。

実は、「ナポレオンの村」にはフィクションの部分も多いのですが、高野は実際に神子原米という名前から、「神の子が宿る地で作られる米」としてブランディングを進めました。持ち前の行動力で在日パチカン大使館に手紙を送り続け、ついにはローマ法王に神子原米を献上することに成功したのです。

一番難しかったのは、地元の人々の意識を変えることだったかもしれません。集落の住民からは当初、「本当に高く売れるのか」という不安やためらいの声がかげられました。そこで、都市部の人々を呼び込んで、農業体験などを通して、少しずつ神子原米の認知を広めていきました。

また、ブランディングに際して重要だったのは、「ターゲットを絞ること」と、他との違いを押し出すことでした。ターゲットを決める上では、あこがれを喚起することも重要な戦略と考え、あえて、ローマ法王という不可能にも思えるほど高い目標を設定したので。加えて、生活排水の入らないきれいな水を使うのは、平野部ではなかなか真似できないことです。

創生——地元の魅力に目を向ける

羽咋市役所 産業建設部農林水産課 課長補佐 清水吉朗

Voice

29

を含めた羽咋市全体をどう活性化するか……。そこで今年度から本格的に始めたのが、「自然栽培」の推進です。

近年、有機栽培や無農薬栽培が注目を集めています。例えば、ブタのふんを堆肥に使う場合、そのブタが食べる飼料には化学品が入っていないことが少なくありません。自然栽培とは、そのような肥料も農薬も一切使わず、自然のまま作物を育てる農法なのです。

私たちは、将来的には羽咋市が自然栽培の聖地となることを目指して、市全体で一丸となって取り組んでいます。その象徴とも言えるのが、農業協同組合（JA）との連携です。肥料や農薬などの販売もしているJAの協力が実現した背景には、地元、「能登の里山里海」が世界農業遺産に認定されたことも大きく影響しています。

世界農業遺産（GIAHS）とは、その土地の環境を生かした伝統的な農業・農法や、生物多様性が守られた土地利用、農村文化などを目的に国連食糧農業機関が創設したものです。「能登の里山里海」は、2011年6月に日本で初めて認定されました。能登の農村文化の中心には、昔



同じく世界農業遺産に登録されているフィリピン・イフガオ州とも交流がある

から、神子原米の特長として差別化ができたわけです。

世界農業遺産の地に 人々を呼び寄せる

ローマ法王に献上された米として神子原米は有名になりましたが、行政としては手放しで喜んではいられません。他の地域

からため池があります。そこから水路で田畑に水を引くので、季節によって、ため池の水位が変化し、さまざまな生き物のすみかとなっています。人間にとっても、古くは、ため池を単位に集落の共同体が形成され、池を管理するためのルール作りから文化が生まれ、そして、能登を代表する農耕の祭り「あえのこと」などが現在まで受け継がれてきたのです。

こうした農村文化や生物の多様性を生んだ農業システムそのものが地域の宝として認められた——それが、能登の里山里海の魅力でしょう。世界農業遺産は、まだまだ知名度が低いので、ぜひ皆さんにも覚えてもらい、足を運んでいただきたいと思えます。

観光地としての魅力向上ももちろんですが、私たちが真に目指すのは地域の創生、つまり、羽咋市

の人口を増やし、活気を取り戻すことです。移住者を積極的に受け入れたことにより、神子原地区にある菅池町には3人の若者が移り住み、家庭を築いてくれました。

その内2組は自然栽培にも取り組んでいます。こうして菅池町は、人口の50%以上が65歳以上という限界集落から脱却し、集落の祭りも復活したのです。

今年度からは、総務省の地域おこし協力隊の事業を活用し、都市圏から若い人材を受け入れて、自然栽培の実践や普及推進、獣害が問題となっているイノシシの肉の加工や皮を使った製品作りに挑戦してもらっています。

新しい住民の力を借りながら、次の世代に文化を受け継いでいくことが、日本の美しい農村を輝かせ続ける道なのではないでしょうか。



自然栽培農業に取り組む神子原地区菅池町への移住者

△Profile▽

しみず・よしろう
1988年羽咋市役所に就職。税務課や健康福祉課、環境安全課などを経て、現在は、農林水産課課長補佐として、農業振興や6次産業化対策などを担当する他、商工観光課を兼務。農林水産課在籍通算10年目。



神子原地区の棚田は、区画整理された四角い形が特徴だ

Q3. 参加したいけど、どこで情報を集めたらいいの？

A3.

外務省とJICAは、地方自治体関係の方には「自治体連携強化セミナー」、中小企業関係の方には「ODAを活用した中小企業海外展開支援セミナー」などを開催しています。

これらのセミナーでは、地方から開発途上国に事業を展開する際に、どのようにODA事業を活用できるか、用意されているメニューを解説し、自治体や中小企業の海外展開例を共有することで、効果的な活用につなげてもらうことを狙っています。今後も、各地の素晴らしい技術やノウハウを世

界の開発課題の解決に生かしていけるよう、複数の地域でセミナーを開催していく予定です。

これらの事業に関心のある方は、外務省ホームページのトップページで、「自治体」もしくは「中小企業」と検索してみてください。事業の概要や過去の事例の他、リンクからJICAの関連ページをご覧ください。ごめんとできます。



JICA主催による大阪市での地方連携セミナー（提供：JICA）

Q1. 外交や開発協力って国の役目ではないの？

A1.

いいえ、国だけではありません。諸外国との交流には、国レベルの経済交流だけでなく、企業による開発途上国への協力から、自治体の姉妹都市提携まで、さまざまなカタチがあります。国にとって、地方は外交を進める上での重要なパートナーであり、外務省には地方連携推進室という部署も設置されているのですよ。

地方には、保健医療や上下水道、廃棄物管理など幅広い分野で素晴らしい技術やノウハウを持った自治体や中小企業、大学、NGOなど、さまざまな

アクターがいます。彼らの知見は、多くの課題を抱える開発途上国にとって有益です。一方、海外との交流を深めることは、地方のアクターにとっても、事業拡大や人材育成といった観点から重要なのです。

そこで、外務省では、ODA（政府開発援助）を活用したあらゆる協力のスキームを提供することで、そのマッチングを図っています。これにより、途上国の課題解決を目指す中で、地域の振興が実現しているのです。

世界を舞台に活躍しよう！

JPO派遣制度を通じて国連児童基金（UNICEF）グアテマラ事務所に派遣された青少年開発担当官の福田由紀さん（右から2人目）



外務省では、将来、国際機関の正規職員として勤務することを志す国民を、原則として2年間、各機関に派遣し、国際専門職として必要な知識・経験を積む機会を提供する「ジュニア・プロフェッショナル・オフィサー（JPO）派遣制度」を実施しています。その選考のための「JPO派遣候補者選考試験」の応募受付を4月1日から開始しました。

応募資格は、①35歳以下、②修士号を取得または取得見込み、③2年以上の職務経験、④英語で職務遂行可能、⑤将来にわたって国際機関で働く意志を持つ一、の全てを満たす日本国籍保持者です。

第一次審査は書類選考のみで、選考通過者は第二次審査に進みます。第二次審査は、東京、ニューヨーク、ジュネーブの3つの会場で試験を実施します（国連開発計画（UNDP）および国連世界食糧計画（WFP）志望者は電話での試験となる予定）。

<出願受付期間>

2016年4月1日（金）から5月9日（月）まで

<提出書類>

和文応募用紙/ 英文応募用紙/ TOEFL (iBTまたはPBT) あるいはIELTSのスコア証明書*

*応募締切日からさかのぼって2年以内に受験したスコアのみ有効

詳細は、外務省国際機関人事センターのホームページ「JPO派遣候補者選考試験」の「募集要項」

<http://www.mofa-irc.go.jp/jpo/boshu.html> を参照ください。

Q2. 地方はどのように開発協力

A2.

近年は、特に中小企業の活動が活発です。中小企業の活躍を通じた地域の活性化は政府の重要施策の一つでもあり、外務省では、2012年から「ODAを活用した中小企業等の海外展開支援」事業を実施しています。

このスキームの狙いは、中小企業が自社の製品やノウハウを途上国の課題解決に生かしながら、同時に海外展開の可能性も広げていくことです。企業には自社の製品・技術などが途上国の開発に活用される可能性やその実証・普及方法を検討する調査・事業などを行ってまいります。

POINT

- 1 日本は、国と地方の総合力で開発協力や外交を展開
- 2 中小企業や自治体も技術やノウハウを生かしてODA事業に参加している
- 3 外務省は自治体や企業向けのセミナーを各地で開催

に参加しているの？

山口県の多機能フィルター株式会社の事例を紹介しましょう。同社の「多機能フィルター」は、豪雨・洪水被害や、火山の噴火による荒廃地の土壌保全と緑化に役立つだけでなく、土砂崩れに対する防災機能も備えた製品です。インドネシアでは、地震、洪水、噴火などの自然災害や、大規模な資源開発による森林破壊が問題となっており、同社は外務省とJICAの支援の下、ODA事業として、自社製品を生かした実証事業を実施しました。土壌保全能力の最も高いSP-60という商品がバリ島にあるバトゥール山周辺の荒廃地で使用され、環境修復に効果を発揮しています。



多機能フィルターのSP-60の施工から半年たち、バトゥール山周辺の荒廃地には緑が戻り始めた（提供：多機能フィルター株式会社）



「ここが知りたい」。国際協力に関する政策を外務省の担当者が分かりやすく解説します！

テーマ
地方の自治体や企業との連携

外務省 国際協力局
開発協力総括課 上席専門官

藁谷 栄

WARATANI Sakae

在モンゴル大使館での専門調査員、中小企業勤務を経て、1994年に外務省入省。その後、再度のモンゴル勤務では草の根無償資金協力などを担当。外務省経済協力局で東アジア・東南アジア地域の技術協力を担当し、2015年3月から現職。



二つの世界遺産を求めて

— アフリカの秘境国に行く

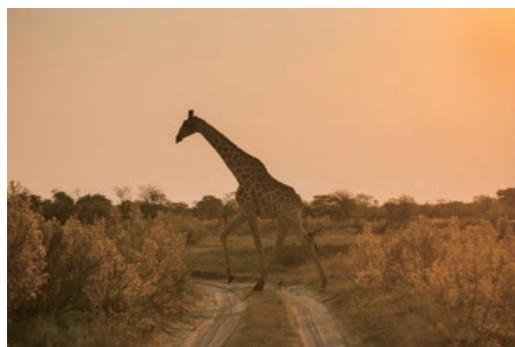
世界自然遺産に登録されているオカバンゴ・デルタ。11～4月に源流部に降った雨が5カ月間かけてこの地に到達するため、5月ごろから増水し、8～9月に最高水位に達する。この時期、乾期の真っ最中であるカラハリ砂漠の中で、デルタはまさに楽園となる



オカバンゴ・デルタに到達した川の水は最終的には蒸発する。内部には無数の水脈が走り、陸路のアクセスは限られるため、超高級ロッジには自家用飛行機の滑走路が併設されている

わずか203万人が暮らす小さな国だ。この希薄な人口の要因に、国土の大半を占めるカラハリ砂漠の存在がある。その広さは日本の4倍とも言われ、ボツワナを中心に周辺国まで広がっている。砂漠と言っても雨期には若干の雨が降り、地表は草原や低木で覆われているから、むしろサバンナと言うほうがふさわしい。だが乾燥に加えて平均標高が千メートルを超えるため、昼夜の寒暖差が非常に厳しく、人間活動に大きな制約を課している。

この過酷な大地にあって「カラハリの宝石」と呼ばれるのが、オカバンゴ・デルタ。遠く北西にあるアンゴラ山地の降雨を集めた川が、千キロ以上も流れてボツワナに至り、緩やかな盆地状の地形で氾濫を起こしてきた珍しい内陸デルタ（三角州）である。川はここで蒸発して消えるのだが、氾濫原は四国を凌ぐ広さの緑豊かな湿地帯になっている。当然ながら野生動物の宝庫でもあり、世界の富裕層の穴場リゾートとして、まさに知る人ぞ知る場所である。



デルタ東部に位置するモレミ野生動物保護区には四輪駆動車で入れる。中にはキャンプ場もあるが、近年はアフリカゾウが急増していて油断大敵だ(下)。突然、大型哺乳類と鉢合わせすることもあり、あまりの至近距離にお互いに驚かされる(左)



レイコップスから南西に十数キロ離れたゼレ村へと向かう未舗装路。この辺りは低木も生えない草地で、カラハリ砂漠の茫漠とした地平線が広がる

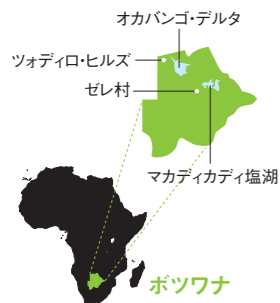


ボツワナの旅は「カラハリの戦い」と言ってもよい。いや、そもそも勝ち目などないのだから「洗礼」と言うべきかもしれない。近年では日本発の高額ツアーも催行されているが、とにかく交通インフラが乏しい国なので、旅には自前の交通手段、それも頑丈な四輪駆動車が要る。目的地まで、地平線に消えるアスファルト道を数百キロ、時に千キロ以上も走り、さらにその先には砂深い悪路が待っている。行けども行けども変化しない茫漠たる風景にうんざりし、時に道をふさぐウシの群れや野生動物の飛び出しに肝を冷やす。悪路では、身体が痺れそうな振動や尻が跳ねるほどの揺れ、それに容赦なく目や鼻口に侵入する砂のパウダーに閉口する。だが「洗礼」の先に、地球最上の絶景がある。

アフリカ南部にあるボツワナ共和国は、南アフリカ共和国の北にある内陸国で、日本の約1.5倍にあたる57万平方キロの国土に、



カラハリ砂漠の真ん中にあるゼレ村は、住民の生活向上や自然保護のために、政府が狩猟採集民族の再定住地として設けた新しい村である。ブッシュマンと呼ばれる先住民やその混血など400人が暮らす



ボツワナ
 1956年秋田県生まれ。85年の開放間もないチベットの取材を皮切りに、以来、開発途上国や秘境を中心に50カ国以上、200件近くの世界遺産を訪れる。著書に、森谷公俊氏（歴史学者）との共著『図説アレクサンドロス大王』（河出書房新社）がある。

とここで、意外なことにカラハリには数万年に及ぶ人類の歴史がある。今では少数民族となつてしまったサン族、通称ブツシユマンと呼ばれる先住民は、紀元前からこの地で狩猟採集生活を営んできた。かつて入植者はその暮らしを「原始的」と見下していたが、人類学と考古学の研究が、彼らのシャーマニズムを中心とした思想・文化、そして自然学における超人的な博識を明らかにして、侮蔑的な評価は一変した。その最高の歴史的証拠が、4500点もの古代岩絵を残すツォディロ・ヒルズである。ツォディロはカラハリの大平原にそびえ立つ孤高の山塊で、太古から聖山として崇拜されてきた。岩に絵を描くことは、シャーマニズムにおける重要な所作であると考えられるが、いまだ多くの謎を秘めたままである。

最後になるが、以前、日本でボツワナが話題になったことがある。2002年、長引く不況で日本国債の格付けが下がり、政界で「アフリカの国より低い」と騒ぎになったのである。その「アフリカの国」がボツワナであった。実はボツワナは世界一のダイヤモンド産出国で、経済的に非常に安定した国なのだ。国は資源の枯渇を見据えて、ダイヤモンドで得た収益を学校教育に注ぎ、初等教育の無料化と徹底を図っている。経済的な安定は治安の良さももたらし、小国だがアフリカの優等生とも称されている。

しかし一方で、全国民の雇用を担う産業が育っていない実情もある。特に農村部での失業率は50%前後とも言われ、現金収入の無い人々は国の福祉を頼るしかない貧しい生活を送っている。アフリカの優等生も、周辺の国々と同じく問題は山積している。



[左上] フィメール・ヒルに残っている岩絵の一つ。圧倒的に野生動物の絵が多いが、場所によってはシンボリック化された人間像なども描かれている
 [右上] 車輪型の幾何学文様は、シャーマニズムの印であるというが、いまだ謎を秘めている

世界文化遺産のツォディロ・ヒルズ。右が主峰のメール・ヒル(男丘)で、奥に見えるフィメール・ヒル(女丘)には多くの岩絵が残っている。岩絵の歴史は紀元前にさかのぼるとみられているが、現在残っているものは9世紀から数百年間にわたって描かれたようである



ゼレ村にある小学校。この校舎には150人の児童がいる。先生はなかなか厳しく、少々おびえながら真剣に授業を受ける1年生たちがほほ笑ましい



ゼレ村では、持ち回りで担当者を決めて、パンと飲み物を村民に配る。担当者は、作業の報酬として国から現金を受け取るという国家の福祉プロジェクトの1つだ



華やかなイベントと言えば

ビューティーコンテスト



コンテスト前にメイクしてもらおう出場者

ボツワナの女性たちは、ビューティーコンテストが大好き。行政や学校が主催して、毎年さまざまな場所で開催される。

その一つが、「ミスRADPコンテスト」だ。RADPとは、遠隔地の村の自立支援を目的としたプログラムで、対象の村出身の18～25歳の女性が出場できる。出場者は10日間の事前合宿に参加して、ウォーキングやパフォーマンスをみっちり練習する。また、生活習慣や健康管理についての講義を受け、外見だけでなく内面の美しさにも磨きかける。

コンテスト当日は、ドレスを着てのウォーキングや、民族衣装を着てボツワナの文化をパフォーマンスで表現する審査が行われる。華やかに飾り付けられた会場と、こぞってドレスアップを楽しむ観客が大会を盛り上げる。そして最終審査の質疑応答を経て、栄えある「ミスRADP」が決定。優勝者

には賞金約50万円が与えられ、故郷の村の発展のために活用される。

美を追求する女性たちが、国を発展させる原動力となっているのかもしれない。



事前合宿は泊まり込みで行われ、ウォーキングなどの基本動作を鍛える

地球ギャラリー

ボツワナの文化を 知ろう!

ボツワナのごちそうと言えば、まず欠かせないのがセスワだ。作り方はとてもシンプル。大きめに切った牛肉を熱湯でゆでる。塩を加えて約2時間、牛肉がほぐれるまで煮詰めたら完成だ。ボツワナでは何かお祝い事があれば、鍋いっぱいセスワが振る舞われる。屋台では、大きなドラム缶を使って調理している光景を見掛けることもある。

一方、都市部でよく見かけるごちそうが、ケチャップとマヨネーズをかけたご飯だ。野

菜や魚など好きな具材を入れて、よくかき混ぜて頬張る。中には、ケチャップが何から作られているのかわからない人もいるが、そんなことはお構いなし。子どもから大人まで、みんなが大好きなひと皿だ。

新宿区に店を構える「Tribes」では、アフリカのさまざまな地域の伝統料理やお酒が楽しめる。事前に予約すれば、料理や国をリクエストすることもできるそうだ。アフリカの雰囲気に浸りに、ぜひ一度訪れてみては。

ボツワナ料理と言えば

セスワ&ケチャップ・マヨネーズ丼



【SHOP INFORMATION】



Tribes

〒160-0007

東京都新宿区荒木町7-14

AXAS四ツ谷三丁目101

営業時間: 17:00~24:00

(土曜17:00~23:00、日曜・祝日定休)

電話番号: 070-5366-0092

HP: <http://www.tribes.jp/>

※セスワとケチャップ・マヨネーズ丼は通常メニューには含まれません

レシピ協力: NPO法人アフリック・アフリカ

【RECIPE】

【セスワ】

●材料(4人前)

牛肉 2kg / 塩適量(目安20g)

- 1 牛肉を大きめに切り、ひたひたの水を加える。
- 2 塩を加えて強火で煮立たせる。煮立ったら弱火にして、牛肉がほぐれるまで1時間半～2時間ほどゆでる。
- 3 煮汁を取り除き、木べらを使って牛肉を細かくほぐす。
- 4 取り除いた煮汁を少しかけて混ぜれば出来上がり。

【ケチャップ・マヨネーズ丼】

●材料(10人前)

米 1～2kg / スパゲティ(米が足りない場合) 500g / 食用油適量 / 固形コンソメ 2～3個 / ジャガイモ 2個 / ニンジン 2個 / オイルサーディン 1缶 / ケチャップ適量 / マヨネーズ適量 / コショウ適量

- 1 沸騰させたお湯に食用油を加え、米を入れる。米の量が十分でなければ、スパゲティを折って加える。
- 2 適当な大きさに切ったジャガイモとニンジンを、固形コンソメを溶かした水で煮る。
- 3 炊けた米を皿によそい、上から②、オイルサーディン、ケチャップ、マヨネーズをかける。お好みで、②の煮汁とコショウをかければ出来上がり。

イチオシ!

M OVIE

『オマールの壁』

ヨルダン川西岸地区のイスラエル入植地を囲み、パレスチナ人の日常生活を妨げている分離壁。パレスチナに住むパン職人の青年オマールは、監視塔からの銃弾を避けながら、壁をよじ登っては、向こう側の恋人ナディアのもとに通っていた。占領状態の続くパレスチナには、人権も自由もない。こんな毎日を変えようと仲間と共に立ち上がったオマールだが、イスラエル兵殺害容疑で捕らえられてしまう。一生とらわれの身になるか、裏切者として生きるか——。製作スタッフも撮影地も全てパレスチナの本作品。パレスチナの今を生き抜く若者たちの青春を鮮烈に描いている。



2013年／パレスチナ／1時間37分
 監督・脚本・製作：ハニ・アブ・アサド
 出演：アダム・バクリ、ワリード・ズエイター、リム・リュバニ他
 公開：4月16日(土)角川シネマ新宿、渋谷アップリンク他 全国順次公開
 配給：アップリンク

B OOK

『人生の折り返し地点で、僕は少しだけ世界を変えたいと思った。第2の人生 マラリアに挑む』

一分に一人、子どもが死んでゆく——。アフリカで蚊帳の現地製造・販売に取り組み、その中で見た光景をきっかけに、マラリア対策をライフワークに選んだ一人のビジネスマンの物語。ビジネスとしての蚊帳販売のエピソードを軸に、アフリカ社会と真っ直ぐに向き合う視線と熱い思いが込められている。



この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

水野達男 著
英治出版
1,728円(税込)

E VENT

『ワンダーリオ写真展@神戸』

いよいよ8月5日に開幕するリオデジャネイロオリンピック。ところで、リオデジャネイロってどんな場所なんだろう。そんな疑問に答えてくれる写真展が、リオの姉妹都市である神戸市で開かれる。会場には、リオの子どもたちが撮影した作品を中心に、約100点のカラー写真を展示。現地に暮らす人たちの明るいパワーや素顔、世界文化遺産に登録されている美しい町並みなど、リオの魅力を存分に感じることができる。また、これまで現地に何度も足を運んでいる写真家の永武ひかるさんによる作品も展示されるほか、臨場感あふれる映像も上映される予定だ。一足早く、オリンピックへの期待が高まるリオの雰囲気浸ってみてはいかがだろうか。

会期：4月1日(金)～5月15日(日)、7月28日(木)～8月31日(水)
 10:00～17:00(入館は16:30まで、月曜休館)
 場所：海外移住と文化の交流センター1階(神戸市中央区)
 問：ワンダーアイズプロジェクト (info@wondereyes.org)
 一般財団法人日伯協会 (078-230-2891)
 URL: www.wondereyes.org/

B OOK

『国際協力アクティブ・ラーニングワークでつかむグローバルキャリア』

「国際協力の世界で仕事をしたいが、何をしたらいいのかわからない」。そう考える人は多いだろう。本書は、援助をめぐる現状やさまざまな課題、そして解決方法を整理し、具体的なグループワーク課題などを通して考え、理解するための教科書となっている。理論から現場までを網羅した国際協力の実践入門書。この本を手元に、世界の課題について考えてみてほしい。



この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

佐原隆幸・徳永達己 著
弘文堂
1,944円(税込)

読者の声

「1月号特集「食」を読んで」

■「日本の伝統食『おせち』にも海外の食材が使われている」。本当に食で世界がつながっていると実感できました。日本の素晴らしい技術を世界にもっと広めていってください。
(愛知県／50代／女性)

■日本がこんなにも海外から食べ物を入力しているとは知らず、驚きました。日本食はヘルシーと思っていたのに、それが外国で作られていてショックです。しかし、日本と海外の国が協力していることも知りました。自分が住んでいる日本、食べているものについて、もっといろいろなことを知りたいです。
(神奈川県／女性)

「2月号特集「ASEAN」を読んで」

■タイの記事で、日本人も人身取引の被害に遭っていること知って驚きました。遠いところの話、くらいにしか思っていなかったのです。もっと自分自身の目を広げていき、どんな形でもいいから力になれるよう勉強していきたいと思うようになりました。
(鳥取県／50代／女性)

■ASEAN特集記事がとても詳しくだったので、大学入試のグループ討議の練習で日本とASEANの関係をとり上げた際に役立ちました。私の学校の姉妹校がシンガポールにあり、身近なASEANをもっと詳しく知りたと思います。また、私は大学で医療関係を学びたいと考えているのですが、日本の医療技術がもっと海外へと広まっていけばうれしいです。
(熊本県／10代／女性)

本誌へのご意見・ご感想や
JICAへのご質問を
お寄せください。

プレゼント
付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2016年5月15日

Eメール：jica@idj.co.jp
FAX：03-3221-5584(『mundi』編集部宛)

- ① キルギスのフェルト製品
- ② 書籍『人生の折り返し地点で、僕は少しだけ世界を変えたいと思った。第2の人生 マリアに挑む』(p37参照)
- ③ 書籍『国際協力アクティブ・ラーニング ワークでつかむグローバルキャリア』(p37参照)



①



②



③

本誌をご希望の場合は
下記方法で
お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形で送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払いください。入金確認後、発送を手配いたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)
住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F
TEL 03-3221-5583
FAX 03-3221-5584
Eメール order@idj.co.jp



次号予告 (2016年5月1日発行予定)

水道

蛇口をひねればきれいな水が出る。日本では当たり前だが、世界では、水道はおろか安全な水なしで生活している人も。少しでも多くの人に、安全な水を。日本の自治体や企業が取り組む協力をご紹介します。

mundi

APRIL 2016 No.31

編集・発行／独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency : JICA

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル

TEL : 03-5226-9781 FAX : 03-5226-6396 URL : <http://www.jica.go.jp/>

バックナンバーはJICAホームページ (<http://www.jica.go.jp/publication/mundi/>) でご覧いただけます。

本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



©Yuki Asada

草と木と、羊毛のぬくもり

かつては遊牧民族だったキルギスの人々。伝統的な生活の中で、ユルタと呼ばれる移動用テントの天幕やじゅうたんは、羊毛で作られていた。ソ連時代の政策で一つの土地に定住する習慣が生まれたが、それから羊毛は重要な輸出品としてキルギス人の社会に根付いている。

キルギス北西部の山岳地帯に広がる“凍らない湖”、イシククリ湖。この湖をいただく高地、イシククリ州での一村一品運動商品の一つに草木染を施した羊毛フェルトが選ばれた背景には、人々と羊毛がつむいできた長い歴史があった。一方、天然の植物を使う草木染は、キルギスの人たちにとって新しい技術だ。

高品質のメリノ種の羊毛とイシククリ州の自然の恵み。クルミ、タマネギ、アカネ

など地域で採れる材料を使い、暖かな色に染め上げられた羊毛を、手作業で一つ一つフェルトに作り上げるのは、地元の人たち。ニードルで刺したり、石けん水を使って毛の束を縮めたりするフェルト作りは、多くの人にとって初体験だ。

生産者の大多数を占める女性たちの生き方は、一村一品運動を通して大きく変わった。これまで社会的地位が低く、嫁いだ後はずっと家庭を守らなければならなかった彼女たちにとって、一村一品運動という仕事のために胸を張って外出できるのは画期的なことだ。また、自分の手でお金を稼ぎ、家計を助けることで、女性の家庭内での地位向上につながる。

キルギスの大地から生まれたフェルトが、女性たちを暖かく包み、育んでいる。



フェルト作りが女性たちの生活を変えた

- ★キルギスのフェルト製品を1人にプレゼント!
→詳細は38ページへ
- ★一村一品運動によるイシククリ地域のフェルト製品の販売情報は、eje & (エジェアンド)のFacebookページで発信中です。
<https://www.facebook.com/ejeand>



イシククリ州
キルギス



私の
**なんとか
しなきゃ!**

Vol. 66

PROFILE

1991年群馬県出身。新潟大学教育学部卒業。「日本カワイイ博in新潟2012」の準グランプリをきっかけに、新潟ガールズ集団「Lily&Marry'S」に参加。地域活性化モデルとして活動を始める。昨年の「ミス・アースジャパン2015」ではグランプリを獲得。現在、したみちオフィス株式会社芸能事業部代表、「Lily&Marry'S」副代表などを務める。

大学時代を過ごした新潟で、私は今、地域活性化モデルとして活動しています。新潟には、優れた技術を持つ企業や、素晴らしい名所がたくさんありますが、十分に知られていないのが現状です。そこで、私が所属する新潟ガールズ集団「Lily&Marry'S」のメンバーが、その場所を訪問したり体験したりして、ブログやSNSで発信しています。

例えば、ある企業が開発したのが、持ち手をシリコン樹脂で覆い、つかみやすさを追求したごみ拾い用のトンゴ。この企業とコラボしたときには、私たちのオリジナルカラーのトンゴを作っただけ、海岸を清掃しました。

こうした活動をより多くの人に知ってもらうためには、私自身の発信力を高めなければ——。そう考えて、昨年、世界的なミスコンテスト「ミス・アース」に出場しました。大会のコンセプトは、環境問題に対して意識の高い女性を育てること。幼いころから自然に親しみ、この仕事を始めるまでは理科の先生を志していた私。思いは人一倍強い自信が

ありました。正直、緊張であまり覚えていないのですが、最後のスピーチではその熱意を伝えた結果、日本代表の座をつかむことができました。

その後、3週間にわたりオーストリアで開かれた世界大会では、毎日が刺激的でした。80カ国以上から集まった出場者は、みんな私と同世代なのに、環境問題はもちろん、世界の出来事や政治に対する意識がとにかく高いのです。各国の環境問題について考えるワークショップに参加した経験は、日本との違いを知る機会となりましたし、何か私にもできる形で世界の問題に関わってきたいという気持ちが、ふつと芽生えました。

今は、シリア難民やパリ同時多発テロなど、世界で問題となっている出来事の背景を調べることから始めています。今年1月には、新潟県内の大学に声を掛けていただき、ドイツ国際平和村で理科の楽しさを伝えるプロジェクトにも参加しました。つらい境遇なのに自然と助け合う子どもたちを見て、胸が熱く

つながる、そして発信する

ミス・アースジャパン2015、地域活性化モデル **山田 彩乃**
YAMADA Ayano

なりました。昨年、豪雨被害を受けた茨城県常総市で支援活動を行った際、ある住民の方が「もっと現状を知ってほしい」と話していました。私にできるのは、人とつながり、自分が見た、感じたものを「発信」すること。それは日本でも世界でも同じだと感じました。

もちろん、地域活性化の活動にも、ますます力を入れるつもりです。ミス・アース出場をきっかけに、出身地の群馬でも仕事の機会が増え、群馬に同じようなチームを作りたいと熱望する女性とも知り合いました。早速、その実現に向けて動き出していて、今からワクワクしています。これからも人とのつながりを大切に、新潟、群馬、そして日本の良さを発信していきます。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索